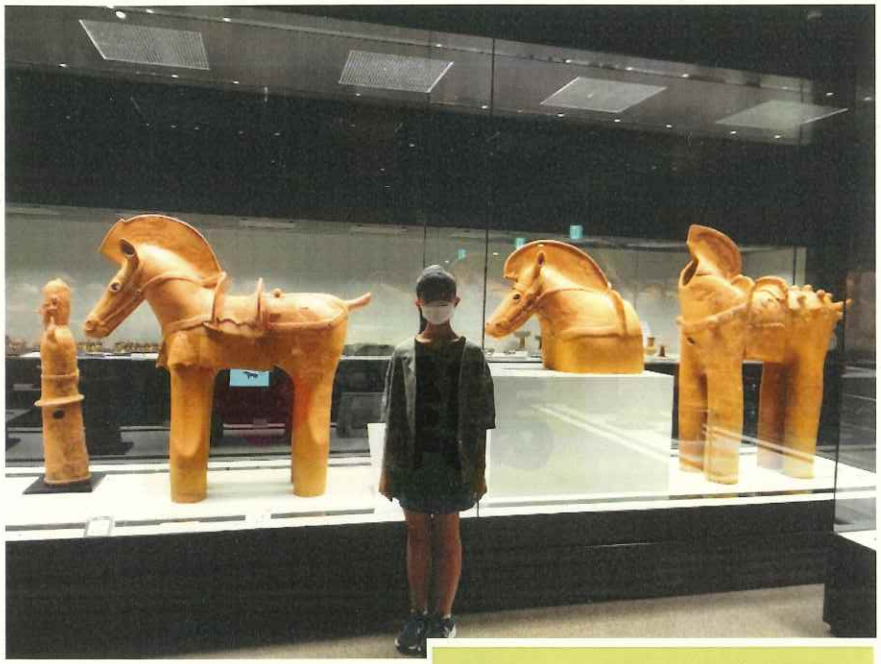
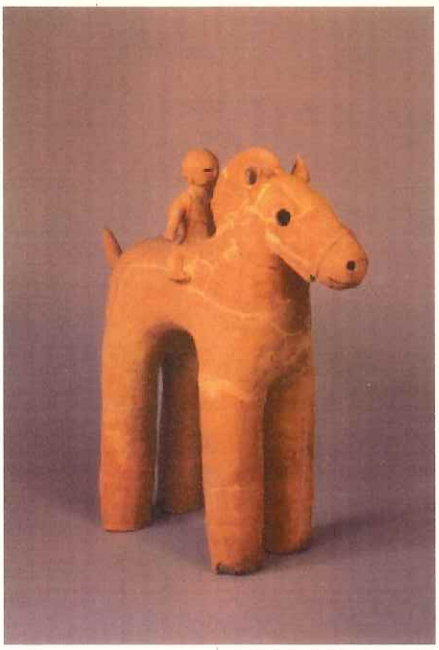
群馬だけに馬がいっぱい!!
~馬形埴輪の謎に迫る~





太田市立太田中学校　2年C組25番　羽中田桜花

1.研究動機

一昨年は女子埴輪、昨年は男子埴輪について調べ、色々な気付きがあった。埴輪について調べていくうちに、人物埴輪だけでなく、動物埴輪にも興味を持った。動物埴輪には、馬、水鳥、犬、鵜、猪、鹿などがあるが、その中でも、特に群馬県で多く出土されている馬の埴輪に関心を持った。「群馬県」の県名にもある「馬」。今年は、馬形埴輪について調べ、なぜ群馬県から多く出土されたのか、どんな特徴があるのか。また馬形埴輪から古墳時代の馬と人間との関わり合い、馬へ対する人々の思いを調べ、推測し、馬形埴輪や群馬県についてより深く知りたいと思ったから。

2.研究目的

群馬県で、馬形埴輪が多く出土された背景を知り、馬形埴輪や豪華な馬具から、古墳時代の馬と人間との関わり合い、馬に対する古墳時代の人々の思いや、馬と群馬県の関係を探っていきたいと思う。

3.調査

（1）調査内容

- 群馬県で出土された馬形埴輪について
- 群馬県で出土された馬具について
- 群馬県で出土された馬形埴輪の数
- 馬形埴輪が多く出土された理由
- 馬の歴史
- 群馬の名前の由来

（2）調査方法

- HANI-本で群馬県から出土された馬形埴輪を見る
- 高崎市にある群馬県立歴史博物館で実際に馬形埴輪を見る
  学芸員さんにお話を伺う

4.研究

馬形埴輪の大きさ

まず最初に、HANI-本で馬形埴輪を見てみた。すると、高林西原古墳群から出土された”高林西原古墳出土の人が乗る裸馬”が目にとまった。私は、ひと目見て、馬に比べて、あまりにも人が小さいのではないかと思った。もしかすると、余った粘土で人が作られたのではと思い、他

の、人が乗っている馬形埴輪を見てみた。他には、雷電神社跡古墳で出土された”盛装した人が乗る馬埴輪”や大阪府の四天王寺物館所蔵の”人が乗る飾り馬”があった。しかし、どれを見てもやはり、馬に対して、人が小さ過ぎると感じた。そこで、実物を見てみたいと思い、所蔵している群馬県立がんセンターや大林寺にアポを取ったのだが、コロナ禍と言うこともあり、公開していないとのことで、残念ながら人が乗っている馬形埴輪は見られなかった。馬の埴輪の出土例はたくさんあるが、人物が乗っているのは、関東地方でわずか7例だそうだ。全国でも、20例しか出土されていない。その上、盛装した人が乗るものは、”盛装した人が乗る馬埴輪”と”人が乗る飾り馬”しか見つかっていないそうだ。これは、共に群馬県から出土したものである。

↑高林西原古墳出土の人が乗る裸馬

馬に比べて、人が小さい?!

↑盛装した人が乗る馬埴輪

↑人が乗る飾り馬

馬と人間の大きさに疑問を感じたので、群馬県歴史博物館の学芸員の飯田さんにお話を伺った。

Q.人が乗っている馬形埴輪について
馬に対して、人が小さい気がするのはどうしてか?

A.人が小さいのは、馬形埴輪に大きい人形埴輪を乗せてしまうと、崩れてしまうのだそうだ。
確かに、群馬県歴史博物館で開催されていた、「バーチャル埴輪」で、馬の埴輪を360°観察した時、中が空洞だった。だから、大きいものを乗せると、重さに耐えきれなくなってしまうために、人を小さくしたのだと思った。疑問は解けたが、やはり、馬に対して、人が小さすぎる件は、重さの問題もあるだろうが、馬を大きく表現することによって、馬が貴重であることを表していたのではないかと私は思った。きっと、馬はとても大切にされてきたのだろう。また、権力の象徴である馬を人間よりも大きく表現することで、埋葬者の権力の大きさを表していたのではないかと思う。

↓馬形埴輪の中は空洞だった

また館内には、こんな看板もあった。
↓

古墳時代の馬は、現在よく知られている馬（サラブレッド）に比べて、小柄だったそうだ。それにも関わらず、馬を大きく作った。小柄な馬をあえて大きくしたということは、それだけ、古墳時代には、馬が大変貴重であったことの現れであると思う。また、馬を所有できた埋葬者の大きな権力も表していたと思う。馬は、移動手段としても、農耕用としても軍事用としても色々な場面で活躍してきた。つまり、とても重宝されていたということだ。

馬＞人の理由と推測

権力の大きさは、古墳の大きさや装飾品などで示された。古墳も大きいものほど、権力の大きい人、偉い人が埋葬されていたと考えられる。それと同じように、もしかしたら、馬形埴輪も大きく作られている＝馬は貴重な存在で重宝されていたのではないだろうかと思った。

そこで、装飾品についても、調べてみることにした。実際に群馬県歴史博物館に足を運び、馬形埴輪や装飾品を見てみた。

装飾品について

装飾品が並んでいる棚には、王様の装飾品、豪族の装飾品、馬の装飾品が並んでいた。王様はもちろん、金の装飾品。豪族は、鉄製で錆びていた。しかし、そのとなりには、王様と同じくらい金ピカに光った装飾品があった。しかも、王様以上に数も多かった。なんとそれは、馬の装飾品だった。

↑金銅製環状鏡板付轡

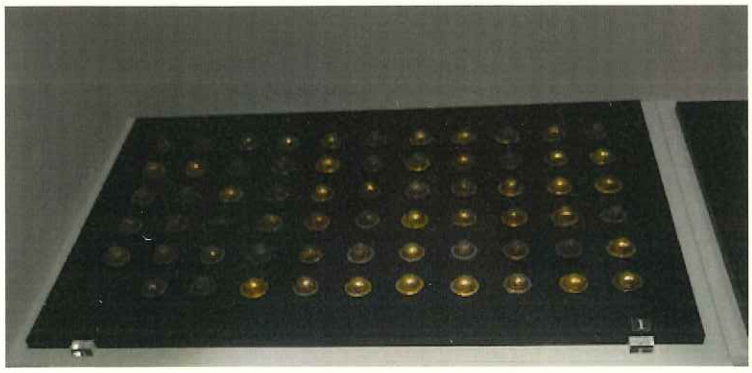
↑金銅製花弁形鈴付雲珠
・辻金具

←金銅製歩揺付飾金具

←鉄地金銅張心葉形
鏡板付轡

全部で70個以上あった!!

←金銅製心葉形杏葉



↑王様の装飾品
・金を使った装飾品
・ピカピカと黄金に輝いていた

↑豪族の装飾品
・鉄を使った装飾品
・錆びてしまっていた

上の王様と豪族の装飾品と馬の装飾品を比べてみると、やはり、王様と同じくらい馬の装飾品が金ピカに輝いていて、数も多く、大きな物もあり、館内でも、ひときわ目立っていた。この馬の装飾品からも、古墳時代に馬がどれだけ大切にされていたかが感じられた。また、馬を豪華に着飾ることにより馬を持つことのできる大きな力を周囲に誇示し、権力の大きさを表していたのだろうと思った。

私は、それぞれ、どの装飾品が馬のどこに付くのか気になったので、館内にある映像を見てみた。すると、
「飾り馬」在来系馬装と、外来系馬装が紹介されていた。私はこれを見て、日本生まれ日本育ちの馬と外国生まれ外国育ちで日本に輸入された馬との装飾品の違いの動画だと思った。そうすると、どうも、外来系のほうが、装飾品が豪華な気がする。さらに、在来系は、尻尾がむき出でふわっと広がっているが、外来系は白い布のようなもので、束ねられていた。

在来系馬装

質素
金銅製環状鏡板付轡（口）

鞍→模様なし、ツルッとしている　（腰）

鉄製壺鐙
金銅製花弁形鈴付金具、
鉄製辻金具（頭）
鉄製雲珠（お尻）

外来系馬装

豪華
鉄地金銅張心葉形鏡板付轡（口）
鞍→周り（縁）に点の模様がついている（腰）
木胎漆塗壺鐙（腰）

金銅製歩揺付辻金具（口）
金銅製歩揺付飾金具（首）
金銅製歩揺付雲珠・飾金具（お尻）
金銅製心葉形杏葉（お尻）

このように並べてみると、外来系のほうが豪華だ。装飾品の数も大きく違う。ということは、外来系の馬のほうが、大切にされていたのか。また、なぜ、埴輪から、日本生まれ日本育ちの馬か、外国生まれ外国育ちの馬だとわかったのか、私は疑問に思い、群馬県歴史博物館の学芸員の「飯田さん」にお話を伺った。

Q.どうして、日本の馬より外国の馬のほうが豪華なのか?

A.この、在来系馬装と外来系馬装というのは、この装飾品が日本で作られたか、外国で作られたかという意味だそうだ。外来系馬装には、金が多く用いられていることから、朝鮮半島の新羅で作られたと推測されているようだ。
つまり、在来系馬装と外来系馬装はあくまでも、装飾品の作られた場所であり、その装飾品で、このように名付けられているのだ。だから、決して、日本の馬より、外国の馬のほうが大事にされていたということではなく、もちろん、日本の馬もとても大切にされてきたのだ。

飯田さん、お忙しい中、貴重なお話
ありがとうございました!!

外来系の馬の装飾品は新羅から輸入されたものだということで、古墳時代、非常に貴重な物であったと考えられる、この貴重な装飾品をたくさんつかい馬を着飾ったということからも、古墳時代に馬が大変貴重で、大切にされていたこと、権力の象徴であったことが伺い知れる。

動物埴輪とは…?

鶏や水鳥を除く動物埴輪は5世紀後半から登場。狩人を助ける犬や鵜、獲物となる猪・鹿など、古墳に埋葬された権力者に関わる動物たちが表現されている。
群馬県内で出土された動物埴輪の数はおよそ390例で、そのうちの9割、つまり350例以上が馬形埴輪だ。
馬は財力や富をアピールできる大切な存在だった。

ではなぜ、馬が権力の証になったのだろうか。

それはきっと、馬が日本では手に入らない貴重な動物だったからだと思う。外国から輸入しないと手に入らない動物だったのではないかと考えた。そう考えた理由は、中国の書物「魏志倭人伝」に、弥生時代の日本について「馬なし」と記述があった。しかし、5世紀には近畿地方を中心に馬具が出土された。このことから考えられるのは、弥生時代（3世紀）あたりから5世紀頃までの間に日本に馬が登場（輸入された）したこと。その上、近畿地方で見つかった＝朝鮮半島に近い＝朝鮮半島から輸入したのではないかと思った。実際に調べてみると、4世紀後半、朝鮮半島が4つの国に分かれていた動乱の時期。日本のヤマト王権は百済と同盟を結び、高句麗と戦うために半島へ出兵した。日本の人々は戦場で高句麗の騎馬軍団を見た。そして、圧倒的な攻撃力と移動手段としての有能性を目の当たりにして、カルチャーショックを受けたと推測される。そこで、東アジア諸国と渡り合うために大陸系の馬を朝鮮半島から連れてきた。飼育や調教を担う職人集団もやってきて、馬の国産化が進められた。当時の馬は、今でいう乗用車であり、トラックであり、戦車。つまり、日本列島における馬の使用や乗馬は戦いの手段、軍備の一部として広まったのではないかと考えた。人々にとって、馬は「万能」な存在で馬をどのくらい所有しているかによって権力の大きさが決まった。さらに、馬を所有している＝朝鮮半島との繋がりがあり、古墳時代に大きな勢力を持っていたヤマト王権と強い繋がりがあると周囲に力を見せつけることもできる、「馬」はそんな権力の象徴である存在だったと思った。当時、ヤマト王権はとても勢力があった。近畿地方から離れ

た群馬でも馬形埴輪が出土されたということは、古墳時代にはヤマト王権と強い繋がりを持つ、巨大な勢力を持った豪族が群馬県にたくさんいたのではないかと考えられる。
馬形埴輪が群馬県で数多く出土されているのは、古墳時代、群馬県で「馬」が多く飼育されていたからではないだろうかと考えた。

では、なぜ、群馬で多くの馬が飼育されたのだろうか。

群馬にこだわらなくても、他の場所でもよかったのではないかと思った。しかし、それでも群馬県を選んだ理由の一つとして、きっと群馬県が馬を飼育するのに適した環境だったからだろう。馬を育てるには、たくさんの敷地とえさと水が必要だ。群馬県は自然が豊かである、きっと古墳時代はもっともっと自然が豊かであったと思う。そして、流域面積1位を誇る利根川もある。さらに、馬は涼しい環境を好むそうだ。群馬県にはたくさんの山がある。山に囲まれていることで、涼しく馬の生育に適した場所であったのだと思う。
さらに、群馬県はヤマト王権とつながりが深かったことも馬が多く飼育された理由だろう。ヤマト王権と群馬県は、東山道でつながっていた。そして、このルートを使って、群馬県で生産した馬をヤマト王権に送るようになった。生産された馬は毎年、50頭をヤマト王権に貢納していたそうだ。さらに、高崎市の剣崎長瀞西遺跡の南側にある平塚古墳を後に作ることになった首長が、馬の生産技術をもつ渡来人を招き入れたことも要因の一つだろう。群馬はそういう面で馬が多く飼育されたのではないだろうか。

馬が重宝された理由

・権力が示せる
・兵馬
・移動
・輸送
・農耕
・土木作業

群馬の名前の由来

群馬県には昔「車」という地域があったそうだ。今の前橋のあたりで「車評」くるまこおり、という地名だ。しかし、奈良時代に国・郡・郷

は地名を一文字ではなく二文字にしなさいという条例が出て、群れる馬「群馬」と名付けられたそうだ。このことからもわかるように、群馬県では、古墳時代からその後も、馬が多く飼育されていたことが伺える。そして、大切な県名に使われるほど、馬はそれだけ大切にされ、縁起の良いものとされてきたのだとわかる。

感想

今回、私は馬形埴輪について調べた。今まで、人物埴輪に着目して、色々なことを調べてきたが、馬形埴輪も奥が深くて、推測をしたり、調べたりすることはとても面白かった。どうして、群馬県で馬形埴輪がたくさん出土したのか真実はわからないが、私が考えるに、群馬県でたくさん馬が飼育され、様々な場面で活躍し、豪華な装飾品がついていることは事実だ。それだけ、当時、馬は重宝されてきたのだろう。人々にとって、大切な馬。今も「群馬」という名前が親しまれている。今と昔をつなぐ「群馬」馬の歴史や、群馬の歴史を今回、初めて知り、とてもびっくりした。正直、今まで私は、群馬県で馬がたくさん飼育されていたことや、ヤマト王権とつながりがあり、古墳時代に栄えていたとは思いもしていなかった。しかし、今回の自由研究により「群馬」は昔から、すごかったのだと感心した。そして、群馬県民だからこそ、もっともっと、群馬のことについて知り詳しくなりたい。そして、堂々と群馬は素晴らしいことだとPRできるようになりたいと思った。今回、私が調べたことは、ほんのわずかな歴史の一つだ。これからも、たくさん東国文化のことを知れたらなと思う。この研究に協力してくださった皆さんありがとうございました。

引用

HANI-本あなたの知らない、はにわの世界イチ推しはにわ200体

東国文化副読本

群馬県歴史博物館

https://www.pref.gunma.jp/01/bu0100011.html

https://topics.tbs.co.jp/article/detail/?id=9916